令和6年6月3日 第3号

東中だより

蕨市立東中学校

目 指 す 学 校 像　生徒一人一人を大切にし 信頼される学校
キャッチフレーズ　蕨東のあいさつひとつで笑東へ

生徒数(名)
男子 162
女子 177
計 339

夏の大会風景

校長　阿部　仁

～二市大会が開催～

５月28日のサッカー競技の試合を皮切りに、令和6年度学校総合体育大会 蕨・戸田二市大会が開催された。6月上旬の開催、あるいは県南大会が初戦となる部活動もあるものの、ほとんどの運動部員は、所謂「夏の大会」に挑んだ形となった。

～各部の熱戦～

各競技会場では、各校選手たちが真剣な眼差しで相手と対峙し、観客席からの大きな声援や掛け声が相俟って、熱戦が繰り広げられていた。本校の、どの部活動の生徒も、必死になってボールや球にくらいつく姿がみられた。仲間と声を掛け合い、お互いに鼓舞し合い、顧問からの指示を聞きながら、なんとか勝ちをもぎ取ろうと頑張っていた。観客席から試合運びを見つめるだけの私にも、選手たちの頑張りを見ながら、熱い思いが込み上げてきたのは、1度や2度ではない。真剣になって何かを成し遂げようと人が行動する時、その人の思いや願いが見ている人にも伝播することがある。それを私たちは「感動」と呼ぶ。二市大会で、生徒たちから沢山の感動を貰ったのは、まぎれもない事実である。

～真剣勝負～

平成14年の夏、全国中学校体育大会（全中）剣道競技に生徒を引率して参加した時のこと。各都道府県予選等を勝ち抜いた精鋭選手たちによる試合は正に“激闘”の連続だった。掛け声の大きさとともに、気迫を全面に出して互いにぶつかり合う姿は、中学生とは思えないものだった。竹刀を使ってはいるものの、文字通り“真剣勝負”が繰り広げられている。その選手たちの姿勢から目が離せなくなることも度々あった。相手に正対し、邪念を捨て、精神を集中して物事に当たる時の姿は、他人を惹き付ける何かを生む。これも一つの「感動」なのかもしれないと思った。

～勝敗を超えて～

トーナメント戦であれば、敗退するチームの負け数はみな同じ「1敗」である。1敗もしないチームや選手が、全国優勝するだけである。負けの数では平等。であれば、勝敗の数以外に、試合から何を学んだかが重要である。単なる悔しい思い、勝った爽快感だけにとどまらず、試合で考え、感じた「何か」を見つめて欲しいと思う。最後の夏となった３年生の選手たちは、試合後、笑顔であったり結果を納得して受け入れている様子が多かったと聞く。それが「何か」を得た結果としての姿であれば、それ自体が勝敗以上に大事なものを得た大金星であると私は思う。

手前みそで誠に恐縮であるが、本校の教職員の、部活動顧問としての指導方針や考え方は、生徒たちの心に届いている指導であると数々の試合を観戦して確信している。同時に、そのような指導に徹してきた先生方に深く感謝したい。

－了－

UD FONT　ユニバーサルデザインフォントを使用しています。次号は７月１日(月)に発行予定です。